其意候、何様以参御禮可申と可有之、

一互禮なしとの時は其通りに致し可然、又茶主より右の通り申参候とも、茶主、名物持ならば返事と相違にても不苦、必禮に参るべし、其外は客と主との位によるべし、了簡肝要なり、

〔はいかい袋下秋〕寛政十一年未九月、雪中菴蓼太空摩居士正當十三回追慕俳諧　兩吟

遠州茶の前禮に行ばなや　大江丸

城の太鼓も雨ちかげなる　不二菴

主客

〔茶道早合點下〕茶の湯の大概

上座の客を正客と云、末に居る客を結と云、客三人を三人結と云、四人を四人結と云、

〔南方錄二〕上客世禮之貴賤に不寄事

草菴の會、賞客といふは、貴賤に不寄申入たる人を上客とあしらふ也、平生の高下によらず、休利休の會に錢屋宗納賞客にて入來有けるに、木村常陸不圖案内して腰掛に入、能折からに候、座に加へたまはるべき由云入らる、居士むかひに出て一禮し、常陸殿宗納の御相伴有て玉わり候へと被申、元よりその心得に候とて、常陸末坐にて相濟けると也、草菴の作法如是、貴賤一同露地の本意、誠に殊勝の事共也、

〔備前老人物語〕多賀左近、客二三人を請じて茶湯興行すべき約ありしに、ある大名此事をつたへきゝ給ひ、此人の茶會つねにのぞみ思ふ所なれば、人々と同じく参らんとのたまひけり、人々も去かるべしといひて、左近の許へかくといひつかはして、つれだちてゆく、左近迎に出、忝よしをいひて、かの大名にうちむかい、今日の御來駕思ひよらず、ことに忝き仕合也、さりながら今日の義、三人の人々、本きやくの事に候得ば、はゞかりながらあとより入らせられ候やうにねがひおもふ所也、後日にあらためて御儲をば仕べきとありけれ、そののち客衆前後の辭退再三におよ